

Twitter (現 X) 上の〈出会い〉の場面における活動の選択 The selection of activities in “encounters” on Twitter (X)

藤田 華奈[†], 坂井田 瑠衣[†]

Kana Fujita, Rui Sakaida

[†] 公立はこだて未来大学

Future University Hakodate

fujita.univ@gmail.com

概要

本稿では、Twitter における出会いの場面において、ユーザがどのような活動を「場面にかかわりのある活動」として選択しているのかを明らかにした。企業アカウントの挨拶ツイートとそのリプライ計 105 件を対象に分析を行い、特に挨拶と会話という 2 つの活動に着目した。ゴフマンの「関与」概念に基づく分析から、Twitter においては挨拶活動が支配的関与として位置付けられ、関与は投稿者ではなく受け手側によって選択されることが示唆された。

キーワード：ソーシャルメディア (social media), 相互行為分析 (interaction analysis), 共在 (co-presence)

1. はじめに

本稿では、Twitter (現 X) における出会いの場面において、ユーザがどのようにして特定の活動 (例：挨拶や会話) を「場面にかかわりのある活動」(Goffman, 1963 丸木・本名訳 1980) と見なしているかを明らかにする。

こうした研究目的の社会的背景には、インターネットを利用したオンライン上でのコミュニケーションの普及によって、私たちが相互行為を行う舞台が徐々に広がりつつあることが挙げられる。拡張された舞台である非対面状況は、対面とは異なる制約と資源をもつことから、相互行為技法も異なると考えられる。

こうした相互行為を行う能力や方法の解明は、相互行為を研究する分野であるエスノメソドロジーや会話分析において重要な課題とされてきた。しかし、対面的相互行為の研究に比べると、非対面状況、とりわけソーシャルメディア上で行われる相互行為の研究は十分に進展していない。その背景には、これまで対面的相互行為研究で蓄積されてきた知見を適用することへの課題や方法論的限界といった問題が存在する。こうした背景には、相互行為をとりまく環境の違いが挙げられる。

そこで、本稿では、社会学者アーヴィング・ゴフマンによって提唱された「共在 (co-presence)」という概念に着目する。共在とは、「出会っている」状態も含めて、濃淡はあれ私たちが「一緒にいる」と感じるその全体の状態のことを指す (花村, 2021)。共在は、対面的相互

行為の捉え方において重要な概念であり、非対面状況における〈共在〉を解明することは、非対面的相互行為をとりまく環境の解明につながると考えられる。

以上を踏まえ、筆者らは Twitter 上にも〈共在〉があると仮定し、出会いの場面における挨拶の分析を行ってきた。そのなかで、出会いの場面では会話を交わす活動よりも、挨拶を交わす活動が選択される傾向が見られた。本稿では、こうした事例を、ゴフマン (1963 丸木・本名訳 1980) が提唱した「場面にかかわりのある活動 (occasioned activity)」と「関与 (involvement)」という概念を用いて紐解いていく。「場面にかかわりのある活動」とは、その場面の本質的要素といえる活動のことを指す。例えば、政治演説という活動は、政治集会という場面に期待された活動である。「関与」とは、ある個人がある行為一ひりでする仕事、会話、協同の仕事などをするのに調和のとれた注意をはらったり、あるいははらうのをさし控えたりすることである。

2. 方法

2.1. 分析データ

分析対象は、企業によって運営されている「企業アカウント」である。企業アカウントを選定した理由は、これらのアカウントのコミュニティ内で、毎朝「おはようございます」と挨拶を投稿する慣習が広く見られるためである。このような慣習の存在は、挨拶という行為が当該コミュニティにおいて社会的に定着しており、挨拶における相互行為的特徴が顕著に観察可能であることを示唆している。

分析データには、企業アカウントによる朝の挨拶ツイート (以下、オリジナルツイート) 4 件と、各オリジナルツイートに対して送られたリプライ 105 件を用いた。ただし、アカウントの凍結等により表示されないリプライや、オリジナルツイートを発信したアカウントから返信のなかったリプライは除外している。また、ユーザ間の関係性は限定していない。

2.2. 分析手続き

収集したリプライを精査し、オリジナルツイートに含まれる挨拶を交わす活動と、会話を交わす活動という、2つの活動に基づいて分類を行った(表1)。その結果、(1)2つの活動が含まれるやりとり、(2)挨拶活動のみが含まれるやりとり、(3)会話活動のみが含まれるやりとりの3つのパターンに分類できることが確認された。本稿では、特に出現頻度の高かった(1)および(2)のパターンに注目し、分析を行う。

ここでの挨拶活動とは、「おはようございます」や「よろしくお願ひいたします」などの定型的な挨拶表現を含むテキストを指す。会話活動とは、定型的な挨拶とは異なるテキストを指す(例:「駅の改札で挨拶してくれる駅員さんがいる」という報告など)。

表1 各オリジナルツイートに送られたリプライに含まれる活動の分類

	2つの活動	挨拶活動	会話活動
伊藤美藝社製版所	23	0	2
日清紡	19	9	0
マウスコンピューター	12	10	0
GMOサイン	26	0	4

3. 結果と考察

3.1. データの概要

分析対象とした105件のリプライ中、(1)2つの活動が含まれるやりとりが80件、(2)挨拶活動のみが含まれるやりとりが19件であった。全体の約76.2%が挨拶活動と会話活動を含んでおり、多くのユーザがオリジナルツイートの構成を参照・模倣する形でリプライを行っていることが明らかになった。

以下では、(1)のパターンに該当する2事例と、(2)のパターンに該当する1事例を選定し、会話分析の手法を用いて分析する。

3.2. 事例分析

3.2.1. 2つの活動が含まれるやりとり

事例1の伊藤美藝社製版所によるオリジナルツイートでは、冒頭と末尾に挨拶行為(01,07行目)が行われており、その間に「駅の改札で挨拶してくれる駅員さんがいてありがたいが、帽子のメッシュ部分に感心してしまった」といった内容の会話(02-06行目)が展開されていた(図1)。

02-06行目は定型的な挨拶表現を含まないため、挨拶

図1 事例1



引用 : <https://x.com/itoubigeisya/status/1777841997690339451>

とは異なる活動、すなわち会話活動が行われていると考えられる。したがって、オリジナルツイートでは、2つの活動(挨拶と会話)が並行して展開されていることがわかる。

このオリジナルツイートに対する秀和システム【公式】のリプライでは、「いとびさん、おはようございます! (08行目)」という挨拶行為に加えて、駅員に対する賞賛(09行目)と、帽子のメッシュに関する感想への同意(10, 11行目)が示されている。これにより、秀和システム【公式】が、オリジナルツイートに含まれる2つの活動に関与を向けていることが確認できる。

ここではまず、挨拶活動に着目して分析を進める。挨拶行為には、「挨拶には挨拶を返す」という相互行為上の規範が存在し、これは会話分析において「隣接ペア(adjacency pair)」という概念で説明される(Schegloff & Sacks 1973 北澤・西阪訳 1989)。隣接ペアは、第1成分(FPP: First-Pair Part)に対して第2成分(SPP: Second-Pair Part)が返されると、いったんそこで、FPPによって開始された活動が完了しうるものとして扱われる

(串田他, 2017)．これに基づいて考えると、秀和システム【公式】の挨拶行為（08 行目）は、オリジナルツイートの FPP に応答する SPP として機能しており、挨拶活動が達成されたと仮定できる．

しかし、この仮説は、3 つ目の伊藤美藝社製版所ののりプライによって誤っていることがわかる。伊藤美藝社製版所は 12 行目で「秀和さん おはようございます」と再び挨拶行為を行っていることが観察される。この 3 回目の挨拶行為を検討するにあたり、挨拶という行為がもつ性質について確認する必要がある。前述のように、挨拶は隣接ペアとして機能し、FPP に対して SPP が産出されることが期待されるため、挨拶は SPP が返ってくると期待できる特定の相手に対して行われる行為である。また、挨拶と呼ばれる行動の多くは、両者が相互に認知可能な規則性を素早く作り出すために行われており (木村, 2018), 挨拶の意味内容よりも、挨拶を交わすこと自体に意味がある。

この点を踏まえると、秀和システム【公式】のリプライの時点では、秀和システム【公式】が伊藤美藝社製版所に向けて挨拶を行っている一方で、伊藤美藝社製版所は不特定多数に向けて挨拶を行っている状態であり、挨拶が相互に交わされた状態にはなっていないと理解できる。そのため、12行目の伊藤美藝社製版所の挨拶行為は、SPPとして機能する挨拶行為であり、08行目の秀和システム【公式】の挨拶行為はFPPとして理解されていると考えられる。以上のことから、3回目の挨拶行為によって、ようやく両者が互いに挨拶を交わしたと認識することが可能な状態になり、挨拶活動が達成されたと考えられる。

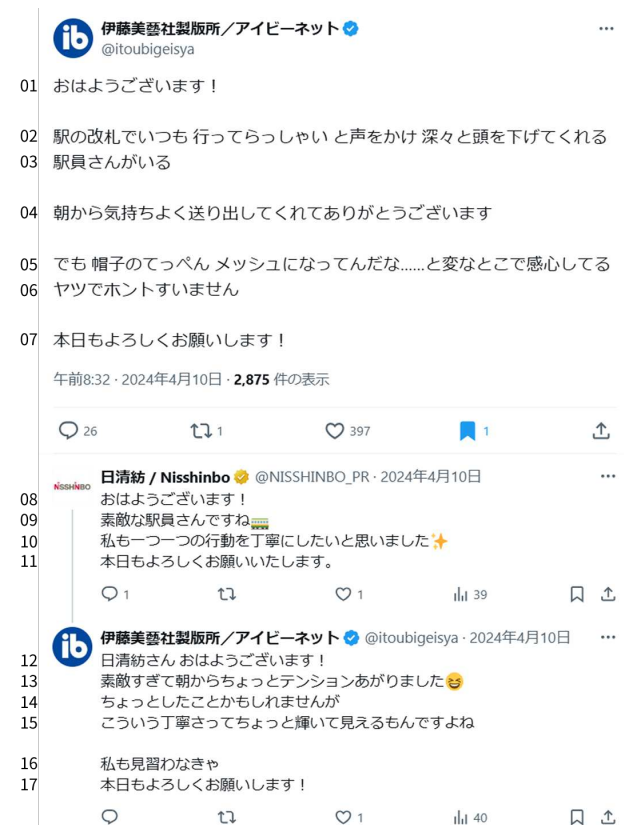
次に、会話活動に着目して分析を進める。会話とは、それ自体が目的となる活動であるため、伊藤美藝社製版所のリプライ（13-17行目）の時点で会話活動は達成されているとも考えられる。実際、2つの活動を含むやりとり80件のうち、3回目でやりとりが終了していた事例は77件であることが確認された。しかし、会話を継続することも十分に可能である。

この現象を考察するうえで鍵となるのが、ゴフマンの提唱する関与の概念である。ゴフマンは関与について、①支配的関与と従属的関与、②主要関与と副次的関与、という2種類の区別をしている (Goffman, 1963 丸木・本名訳 1980)。前者は、いま何に関与を向けるべきとみなされているかに関する区別、後者は、いま実際に何に関与が向けられているかに関する区別である (西阪他, 2013)。

このように関与の観点から事例 1 のやりとりを捉え
ると、次のように記述することができる。事例 1 では、
挨拶活動と会話活動の両方が展開されたが、秀和シス
テム【公式】は挨拶活動が完了した段階でやりとりを終
了しており、会話活動には関与を向けていない。このこ
とから、「挨拶活動」が支配的関与の対象となり、「会話
活動」は従属的関与として位置付けられていたと考え
られる。一方で、やりとり全体を見ると、両者は挨拶と
会話の双方に関与を向けており、両活動ともに主要関
与の対象となっていると考えられる。このことから、本
事例では、支配／従属の軸においては挨拶活動が優先
されているものの、主要／副次の軸においては両活動
とも主要な関与として扱われていることが示唆された。

事例 1 に類似するものとして、事例 2 のようなパターンも観察された (図 2).

図 2 事例 2



引用：

<https://x.com/itoubigesya/status/1777841997690339451>

事例 1 では、挨拶活動と会話活動が展開された後、3 回目のリプライでやりとりが終了していたのに対し、事例 2 では会話の後に「本日もよろしく願いいたします。(11 行目)」といった挨拶行為が行われていた。このようなやりとりでは、会話の後に関与の焦点が再び挨拶活動へと向けられており、挨拶活動が支配的関

与として位置付けられていることが示唆されている。

3.2.2. 挨拶活動のみが含まれるやりとり

本節では、(2) 挨拶活動のみが含まれるやりとりについて分析を行う。事例 3 のオリジナルツイートは、事例 1 と同様に、冒頭と末尾に挨拶行為 (01,06 行目) が行われ、その間に会話 (02-05 行目) が展開されていることから、2つの活動 (挨拶と会話) が並行して展開されていることがわかる (図 3)。

図 3 事例 3

01

おはしびろこう 🌤️ 天気はハレ！

02

今日は何度起きても夢の中で困った日でした(´▽｀)

03

最近たまに現実と夢の区別がつかなくて...

04

フォロワーさんがめっちゃ増えている夢をみたら、目覚めなくなりそう

05

😭

06

では、本日もよろしく願いいたします。

07

#企業公式が毎朝地元の天気を言い合う

午前9:30 · 2024年4月10日 · 1,390 件の表示

08

Sony | So-net【公式】 @Sonet_fukuonsei · 2024年4月10日

日清紡さん、おはようございます(・ε・)/ 🌞

09

日清紡 / Nisshinbo @NISSHINBO_PR · 2024年4月10日

So-netさん、おはようございます 🌞

引用：

https://x.com/NISSHINBO_PR/status/1777856575325233390

しかし、このオリジナルツイートに対する Sony | So-net【公式】のリプライでは、「日清紡さん、おはようございます(・ε・)/ 🌞 (08 行目)」という定型的な挨拶行為のみが産出されており、オリジナルツイートに含まれる会話には言及がされていない。また、これに対する日清紡のリプライも同様に「So-net さん、おはようございます 🌞 (09 行目)」という挨拶行為のみが産出されており、挨拶活動の完了とともにやりとりが終了している。このやりとりは、会話活動がオリジナルツイートに含まれていたにもかかわらず、リプライでは会話に関与が向けられず、挨拶活動のみが選択的に継続されたという点が特徴的である。また、関与の選択が、オリジナルツイートの投稿者である日清紡ではなく、リプライをする受け手側の Sony | So-net【公式】によって行われていることも特徴的である。

このように挨拶活動のみに関与を向けるという実践は、出会いの場面において挨拶活動が支配的関与として捉えられている可能性をより強く示唆している。さらに、関与の選択は、オリジナルツイートの受け手側に

委ねられる傾向があると考えられる。これは、ツイートが不特定多数に宛てられるものであり、オリジナルツイートの投稿者は連鎖が開始されるという確信を得にくいというインターフェイス構造上の制約が関係していると考えられる。

4. おわりに

以上の分析から、Twitter における出会いの場面では、挨拶を交わす活動が支配的関与、会話を交わす活動が従属的関与として位置付けられていることが明らかになった。また、どの活動を場面にかかわりのある活動とするかは、オリジナルツイートの投稿者ではなく、受け手側に委ねられている可能性がある。この関与の配分には、Twitter のインターフェイス構造上の制約が関係していると考えられる。

このように、出会いの場面で挨拶活動が優先的に選択される背景には、常に相手の存在を直接的に確認することができない Twitter の特性がある。Twitter では、たとえ数秒前に投稿されたオリジナルツイートにリプライを送ったとしても、相手はそのリプライに即座に反応を返すとは限らず、行為の連鎖が保証されない。このように、ユーザの意思とは関係なく別れが生じる可能性が常に存在する Twitter においては、出会いの瞬間に「私たちは今、出会っている」ことを相互に確認し合うことが求められる。そのため、挨拶活動は、支配的関与として位置付けられると考えられる。

文献

Goffman, E. (1963). Behavior in public places : notes on the social organization of gatherings. New York: Free Press. (アーヴィング・ゴフマン. 丸木 恵祐・本名 信行 (訳) (1980). 集まりの構造：新しい日常行動論を求めて 誠信書房)

花村 俊吉 (2021). 出会いを達成する「呼びかけー応答」、状態の移行と関係を確認する「挨拶」 木村 大治・花村 俊吉 (編) 出会いと別れ:「あいさつ」をめぐる相互行為論 (pp. 23-43) ナカニシヤ出版

木村 大治 (著) (2018). 見知らぬものと出会う：ファースト・コンタクトの相互行為論 東京大学出版会

串田 秀也・平本 毅・林 誠 (著) (2017). 会話分析入門 勁草書房

西阪 仰・早野 薫・須永 将史・黒嶋 智美・岩田 夏穂 (著) (2013). 共感の技法：福島県における足湯ボランティアの会話分析 勁草書房

Schegloff, E. A., Sacks, H. (1973). Opening up Closings. Semiotica, 8, (pp. 289-327). (エマニュエル・シェグロフ, ハーヴィー・サックス. 北澤 裕・西阪 仰 (訳) (1989). 日常性の解剖学：知と会話 pp. 175-241 マルジュ社)